

# 同志社女子大学における「通史」教育

同志社女子大学嘱託講師

角 谷 江津子

## はじめに

同志社女子大学現代社会学部の「日本の歴史」は、社会科（地歴科）の教職課程設置にともなって開講された。筆者は開講当初から担当し、地理・歴史分野の中学・高等学校教員免許状の取得をめざす学生に教育をおこなってきた。

本稿では、これまでの授業の経験をふまえ、授業の目的・内容・評価方法等について述べ、同志社女子大学の学生に対する「通史」の授業のありかたや方法について考察・検討し、今後の課題を提起しようとするものである。

## 1 授業計画

本稿では、春学期開講の日本の歴史Ⅰについて記す。

日本の歴史Ⅰは同志社女子大学（以下、本学と称する。）では地理・歴史科（地歴科）教職課程の必修科目である。また、文部科学省の意向により、全回の授業において、通史のすべての項目を網羅することが前提となっている。

この要請にもとづき、各回の授業内容に近代史・現代史の内容を付加している。そのため授業回数は全15回を設定、各回の内容量は多く、進度は早い。

授業内容は基本的に高等学校日本史教科書の配列を基礎として、旧石器時代から安土桃山時代へ、日本史の時代区分名を採用して古い時代から新しい時代へと進める。各時代の「転換点」を認識させることが授業の主眼である。

教科書を使用せず、毎回授業資料としてプリントを配布している。これは、

現行の歴史教科書がカラー印刷であり、かつパワーポイント等の電子機器を活用した授業が中学校・高等学校で実施されていることを勘案すれば、やや時代錯誤とも判断されかねないであろう。しかし、定期試験（中間テスト・期末テスト）と入試問題が基本的に白黒文書印刷で実施されている現状をみれば、白黒の資料に慣れることは、ひいては将来教職に就いた際に生徒に与えるプリント作成のレイアウトの工夫、すなわち見やすく、読みやすい授業資料作成業務の訓練またはその一助につながると考えられる。

筆者が、授業担当者としてとくに留意している点は、史料の現代語訳をつけることである。本学には厳密には歴史学科が設置されておらず、原史料にあたる機会をもつ学生は少ない。そこで、授業に引用した史料のほぼすべてにおいて現代語訳を付している。現代語訳は高等学校日本史史料集等の訳文等にもとづいて筆者が作成している。

ちなみに、2018年度日本の歴史Ⅰにおいて引用した史料は、引用順に a『前漢書』地理志 b『後漢書』東夷伝 c『魏書』東夷伝倭人条 d『上宮聖徳法王帝説』 e『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』 f『日本書紀』 g『続日本紀』 h『令義解』 i『山背国愛宕郡出雲国計帳』 j『日本紀略』 k『類聚三代格』 l『源平盛衰記』 m『吾妻鏡』 n『御成敗式目』 o『泰時消息文』の計15である。a～c、g、h、j～mはすべて原典を引用した。なおd、e、fは仏教公伝の年代の諸説を説明する目的で引用したため現代語訳を付さず、i、n、oは高等学校日本史教科書が引用した部分を採用した。

全15回を通して配布する授業資料プリントは約25枚、毎年教材を見直し、内容の修正・改訂・追加をおこなっており、今年度春学期ではA3版片面印刷で計27枚を配布した。実際に2週間の教育実習に行った場合、担当部分は配布プリントの約2～3枚相当であることがこれまでの学生への取材で判明している。

## 2 成績評価

全15回の授業終了後、定期試験期間中に試験を実施している。試験は論述形式で5題、75分間で解答する。これは開講以来変更していない。持ち込みについて近年は授業ノートと配布プリントのみを可としている。開講当初数

年は「一切可」とし高等学校日本史教科書・史料集等も許可していたが、厳格化をはかったものである。1題の大問の中に小問をおくことがあるが、これは解答のためのガイドやヒントとなることを想定している。試験問題のレベルをやや高く設定している。このため、授業時間外の予習・復習と試験前の学習によって授業内容をよく理解していなければ制限時間内に解答することが難しい。

近年の解答の中で、正解がとくに少数にとどまったのは「不課」について史料を引用して説明する」という設問に対してであった。

なお、3年生以上が受講できることから、解答が授業内容の範囲におさまらない場合であっても、授業担当者が正解と認めれば得点を与えることが前提と考えており、これを受講生に発表している。

論述形式の試験に解答するためには、論述能力が高いことが必要である。入学から2年間の大学教育において、これが実現した学生、進行中の学生、未発達の学生におよそ三分することができようか。春学期半年の「日本の歴史」の授業だけで、論述能力の向上をはかることはできない。

これをふまえて、筆者は出席回数を参考にしている。つまり、当該学生がこの答案を書くために、授業にどれほど出席したのかを判断するのである。

15回出席して熱心にノートを取り、授業後に積極的に質問をしても、試験の成績がふるわない学生、反対に、出席回数は多くないが試験で高得点を得る学生、の2タイプに分かれる。前者は論述試験が不得手で制限時間中に適切な答案を書くことができない、後者は持ち込んだ配布プリントと自筆ノートを活用して早く解答に結びつけることができる、ことを意味する。授業担当者は、この両者に平等に対応しなければならない。

そこで、出席回数を平常点として評価に反映することを念頭においている。また、平常点の1つとして授業態度が考えられる。受講生の授業態度は全体として良好で、ずっと下を向いてノートを取る学生がほとんどである。

### 3 アンケートとフィードバック

#### ① 担当者によるアンケート

第1回の授業開始時に、大学指定小レポート用紙を配布し、担当者からの

「アンケート」を実施している。内容は１．なぜこの授業を選択したか ２．中学校・高等学校で受講した社会科科目は何か ３．好きな歴史上の人物、あるいは興味のある事件や時代は何か ４．出身地、現住地 ５．この授業に期待すること、要望 の５項目である。以下、受講生の全体像を把握していただく目的でこれまでの回答の概要について述べることにしたい。

１の解答では、教職課程の必修科目であったからという回答が大半を占める。近年はこの他に、公務員試験一般教養科目の受験対策として選択した、という学生がある。

遺跡の発掘調査や新史料の発見は新聞の文化欄、時には一面に掲載されることがある。このため歴史教育には時事問題という側面もあろう。授業担当者としてこの点に配慮しなければならない。最新の新聞記事を引用して授業をおこなうことがあるが、報道の内容を精査し、冷静に対応することについて同時に指示している。

２の回答では、学年と教科を正確に記す学生がある反面、略記するのみの学生もみられる。近年の特徴として、高等学校で日本史を選択していない、つまり日本史を学習していない学生がみられる傾向がある。当該学生は世界史、地理を選択していることが多い。上記のような学生に対し「日本の歴史」は授業順のみ教科書の配列を参考にしているが、内容は高校の授業とは全く異なると説明し努力を喚起している。

３について、筆者の設問の目的は、受講生に日本史により親しんでもらい、授業に対する問題意識を明確化することである。

回答は、「平安時代」「戦国時代」「織田信長」等があり多様・多彩である。しかし大半は「特にない。」である。また、開講当初はNHK大河ドラマのタイトルに即して授業内容の一部に工夫をしたが、参考のため今年度の受講生に挙手を求めたところ、大河ドラマをみている学生は皆無であった。

４について、地元の遺跡、平城京・平安京などの宮都の位置、歴史事件、戦乱の場所等について、より関心をもたせる目的で設問している。これは秋学期開講の「日本の歴史Ⅱ」の内容に関わることであるが参考のためここに記すと、山口県出身者と福井県出身者で、幕末に活動した歴史上の人物の評価が全く反対になるということがあった。

このように、受講生の出身地、現住地も考慮する姿勢が担当者として重要

であると考えている。

5では「日本史ははじめてなので不安」「高校でやったけど忘れてしまった」が多く、「高校では楽しくなかったので楽しくやりたい」との回答もみられた。

## ② 教務部教育開発支援センターによる「授業に関するアンケート」

このアンケートは、毎学期教務課を通じて実施され結果が担当者にも通知される。

ここでは、筆者の手元にある2016～2018年度の集計結果について略述する<sup>(注)</sup>。なお、2016年度と2017・2018年度は形式が異なっている。

2016年度結果（表1・グラフ1）について、Q8、Q9のクラス平均が科目区分平均、全科目平均を上回る。反対にQ1～Q5はわずかに下回る。これは、日本の通史を淡々と講義するという授業内容と形式から来るものと考ええる。

2017年度結果（表2・グラフ2）をみるとQ2、Q3、Q5の評点が低い。これは前述の授業内容と形式に起因するとともに、内容が受講生にとってやや高度であったことによると思われる。Q8の「工夫点選択率」では「パワーポイント等」のクラス選択率が学科等選択率、全学選択率を上回る。これは1の「授業計画」の項で述べたように、担当者が白黒印刷資料プリントを配布して講義をすすめていることの反動と推測される。

2017年度結果と2018年度結果（表3・グラフ3）を比較するとQ1～Q7においてクラス平均値（グラフ内側）が上昇する傾向が明らかであった。また、興味深い点として、Q12の「履修選択率」において2017年度よりも2018年度に「授業内容」が増加、かつ「資格」が減少していることが挙げられる。これは、将来教職を希望する目的で受講するのではなく、より広く一般的な日本史の知識が求められていることを示すものと考ええる。

2016年度Q10、2017・2018年度Q15の「DWCLA10選択率」をみると受講生は主に思考力・分析力において到達目標に達したと感じていることが知られた。

なお、本学においては「授業に関するアンケート」が紙媒体で授業時間中に実施される。授業時間が縮小される反面、確実に実施することができ、そ

の成果を授業に反映する契機となることが大きな利点と筆者は考えている。

設問には「自由記述」という項目がある。これまでの回答の中に「先生は「ご存じと思いますが」「学習されたことがあると思いますが」「聞いたことがあると思いますが」と言うけれど、私は何も知らない」という記述があり、日本史の基礎知識があることがあたりまえという前提が通用しないことを理解・認識する契機となったことが強く印象に残っている。

### ③ フィードバック

学生からの授業内容に関する質問は、試験が近づくと多くなる。インターネット検索エンジンの浸透により、学生が自分で調べることは簡単になった。しかし一般的な検索エンジンにおいては日本史専門以外の執筆者があり、記事の正確さは不明であることが多い。このため受講生には、授業担当者である筆者に対し、直接質問することを強く希望している。重要なのは授業という直接のコミュニケーションであり、まずこれに休まず出席すること、予習・復習、授業中の疑問・質問には担当者にすぐ質問することを奨励している。学生と担当者との週1回の出会いを有効活用し、直接交流することを重視したいと考えている。

## おわりに

以上、本学の「日本の歴史Ⅰ」について、筆者の経験を中心に述べた。春学期15回半年間の「通史」教育には、時間的制約もあるが、受講生の熱意を支えとして、授業内容や試験問題のレベルを下げることなく、教材や授業方法を吟味し工夫をする予定である。

将来、文部科学省は日本史必修、あるいは日本史・世界史を横断する教科の設置を企図していることが報道等で示されている。このような動向の中で、日本史の基礎的な知識を有していることは重要であり、よりよい「通史」教育が必要とされていると感じる。

数年前「歴女」という語がインターネット等で広がった。歴史に関心があるのみならず日本史の基礎的な知識と学力をもつ、真の「歴女」を育てるため努力したい。各方面からご教示をいただければ幸甚である。

(注) 教務部教育開発支援センターによる「授業に関するアンケート集計結果」2016年度～2018年度春学期を、教務課ならびに教職課程センター(京田辺)の了承を得て筆者が再構成した。

表1 2016年度 結果

■設問別集計結果											
※Q4は選択数に相当する時間(1→0、2→0.5、3→1、4→2、5→3)の期待値(hour/week)を示す											
Q	質問項目	評点分布(%)					回答数	評点平均値			
		5 そう思う	4 やや そう思う	3 どちらとも いえない	2 あまりそう 思わない	1 そう 思わない		クラス	科目 区分	全学	
1	授業内容を理解できましたか。	24.0	32.0	28.0	16.0	0.0	25	3.64	4.13	4.15	
2	授業に意欲的に取り組みましたか。	24.0	32.0	36.0	4.0	4.0	25	3.68	4.14	4.16	
3	授業を通じて知的好奇心が刺激されましたか。	28.0	28.0	28.0	16.0	0.0	25	3.68	4.07	4.08	
4	予復習や自主学習に1週あたりどれぐらい時間を かけましたか。	3時間以上 0.0	2時間 4.0	1時間 8.0	30分 24.0	0分 64.0	25	時間換算期待値(h/w)※			
								0.28	0.54	0.67	
5	授業方法は工夫されていましたか。	24.0	32.0	36.0	8.0	0.0	25	3.72	4.01	4.01	
6	授業レベルは自分に合っていましたか。	難し過ぎ 4.2	やや難し 37.5	合っていた 58.3	やや簡単 0.0	簡単過ぎ 0.0	24	3.46	3.38	3.37	
7	教員の話は聞き取りやすかったですか。	24.0	48.0	28.0	0.0	0.0	25	3.96	4.10	4.11	
8	授業内容はシラバスに合っていましたか。	64.0	28.0	8.0	0.0	0.0	25	4.56	4.26	4.26	
9	授業は集中して学べる雰囲気でしたか。	56.0	40.0	4.0	0.0	0.0	25	4.52	4.29	4.26	
DWCLA10＝卒業までに身につけて欲しい10の力											
Q	質問項目	DWCLA10選択率(%)									
10	DWCLA10のうち、この科目の履修を通して その獲得や向上に役立ったと感じられるものを 選んでください(個数自由、なしも可)。	分析力	思考力	創造力	プレゼン テーション力	コミュニ ケーション力	リーダー シップ	思いやる力	変化 対応力	自己 管理力	自己 実現力
		52.0	68.0	24.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	0.0	0.0



表2 2017年度 結果

## ■設問別集計結果

※1 評点平均値：G9以外は選択肢の点数(4点満点)で計算

※2 G9は選択肢に相当する時間(4→3h, 3→2.5h, 2→1.5h, 1→0.75h, 0→0.25h)の期待値(hour/week)を示す

Q	質問項目	評点分布(%)					評点平均値 ※1			
		4 そう思う	3 やや そう思う	2 あまりそう 思わない	1 そう 思わない	0 わからない	回答数	クラス	学科等	全学
授業 実施	1 授業内容はシラバスに合っていましたか。	38.1	38.1	14.3	4.8	4.8	21	3.15	3.57	3.60
	2 受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか。	19.0	28.6	33.3	19.0	0.0	21	2.48	3.26	3.31
	3 授業レベルは自分に合っていましたか。	9.5	28.6	42.9	14.3	4.8	21	2.35	3.22	3.25
	4 教員からの一方的な授業ではなく、教員と受講生又は受講生同士の双方向性に工夫がされてましたか。	19.0	38.1	23.8	14.3	4.8	21	2.65	3.09	3.24
	5 提出物に対するフィードバック(採点、添削、マンパビーでのコメント、チェック後の返却など)は効果的に行われていましたか。	4.8	14.3	42.9	14.3	23.8	21	2.13	3.00	3.13
	6 言葉による説明だけではなく、受講生の理解を促進する工夫がなされていましたか。	23.8	28.6	33.3	9.5	4.8	21	2.70	3.27	3.32
	7 自主学習を促す工夫がなされていましたか。	4.8	33.3	42.9	4.8	14.3	21	2.44	2.89	3.08
学修 行動	9 この授業の予習、復習、自主学習に1週当たり平均どれくらい時間をかけましたか。 ※学内外を問わず授業に間接的に関係のある学習を含む。ただし、授業時間は除く。	3時間以上 9.5	2時間以上 3時間未満 0.0	1時間以上 2時間未満 9.5	30分以上 2時間未満 28.6	30分未満 52.4	21	時間換算期待値(h/w)※2		
	10 あなたはこの授業に関して積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか。	0.0	23.8	42.9	28.6	4.8	21	1.95	2.21	2.39
	11 あなたはこの授業の分野又は関連分野の学習をさらに深めたいですか。	9.5	47.6	28.6	9.5	4.8	21	2.60	3.02	3.06
到達 目標	13 到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか。	15.0	60.0	10.0	10.0	5.0	20	2.84	3.21	3.26
	14 あなたは到達目標を達成できたと思いますか。	9.5	57.1	23.8	4.8	4.8	21	2.75	3.05	3.06

授業 実施	Q	質問項目	工夫点選択率(%)									
	8	工夫してほしいと思ったことを選んでください (複数選択可、なしも可)。	パワー ポイント等 33.3	話し方 4.8	教科書 0.0	マンパ 9.5	配布資料 9.5	私語対応 4.8	公平性 0.0	その他 9.5		
学修 行動	Q	質問項目	履修理由選択率(%)									
	12	あなたがこの授業を履修した理由は何ですか (複数選択可)。	授業内容 19.0	授業方法 0.0	成績評価 0.0	卒業研究 に必須 0.0	先輩・友人 の勧め 0.0	DWCLA10 0.0	必修 4.8	資格 61.9	英語 で実施 0.0	その他 14.3
到達 目標	Q	質問項目	DWCLA10選択率(%)									
	15	DWCLA10の内、この授業の履修を通して その獲得や向上に役立ったと感じられるものを すべて選んでください(複数選択可、なしも可)。	分析力 28.6	思考力 52.4	創造力 9.5	プレゼン テーション力 0.0	コミュニ ケーション力 0.0	リーダ ーシップ 0.0	思いやる力 0.0	変化 対応力 4.8	自己 管理能力 9.5	自己 実現力 0.0



表3 2018年度 結果

■設問別集計結果

※1 評点平均値：09以外は選択肢の点数(4点満点)で計算

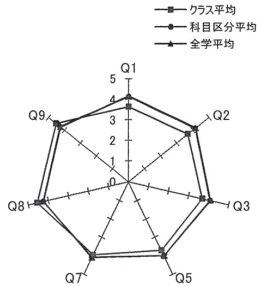
※2 Q9は選択肢に相当する時間(4→3h, 3→2.5h, 2→1.5h, 1→0.75h, 0→0.25h)の期待値(hour/week)を示す

Q	質問項目	評点分布(%)					回答数	評点平均値 ※1		
		4 そう思う	3 やや そう思う	2 やや あまりそう 思わない	1 そう 思わない	0 わからない		クラス	学科等	全学
授業実施	1 授業内容はシラバスに合っていましたか。	56.3	31.3	0.0	6.3	6.3	16	3.47	3.65	3.63
	2 受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか。	37.5	25.0	31.3	6.3	0.0	16	2.94	3.33	3.38
	3 授業レベルは自分に合っていましたか。	31.3	18.8	31.3	12.5	6.3	16	2.73	3.33	3.30
	4 教員からの一方的な授業ではなく、教員と受講生又は受講生同士の双方向性に工夫がされていましたか。	31.3	31.3	31.3	0.0	6.3	16	3.00	3.18	3.31
	5 提出物に対するフィードバック(授点、添削、マナーでのコメント、チェック後の返却など)は効果的に行われていましたか。	18.8	18.8	31.3	6.3	25.0	16	2.67	3.18	3.23
	6 言葉による説明だけではなく、受講生の理解を促進する工夫がなされていましたか。	25.0	43.8	18.8	0.0	12.5	16	3.07	3.36	3.38
	7 自主学習を促す工夫がなされていましたか。	12.5	50.0	18.8	6.3	12.5	16	2.79	3.05	3.16
学修行動	9 この授業の予習、復習、自主学習に1週当たり平均どれくらい時間をかけましたか。 ※学内外を問わず授業に間接的に関係のある学習を含む。ただし、授業時間は除く。	3時間以上 6.3	2時間以上 3時間未満 0.0	1時間以上 2時間未満 0.0	30分以上 1時間未満 12.5	30分未満 81.3	16	時間換算期待値(h/w) ※2		
	10 あなたはこの授業に関して積極的に意見述べたり質問をしたりしましたか。	6.3	25.0	37.5	25.0	6.3		0.48	0.68	0.80
	11 あなたはこの授業の分野又は関連分野の学習をさらに深めたいですか。	31.3	31.3	18.8	18.8	0.0	16	2.13	2.37	2.51
到達目標	13 到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか。	25.0	37.5	25.0	12.5	0.0	16	2.75	3.15	3.14
	14 あなたは到達目標を達成できたと思いますか。	25.0	31.3	31.3	12.5	0.0	16	2.75	3.32	3.33

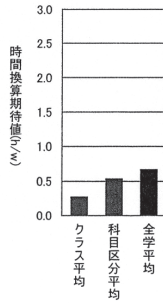
Q	質問項目	工夫点選択率(%)									
		パワー ポイント等	話し方	教科書	マナー	配布資料	私語対応	公平性	その他		
8	工夫してほしいと思ったことを選んでください (複数選択可、なしも可)。	18.8	0.0	0.0	0.0	18.8	0.0	0.0	6.3		
Q	質問項目	履修理由選択率(%)									
		授業内容	授業方法	成績評価	卒業研究 に必須	先輩・友人 の勧め	DWCLA10	必修	資格	英語 で実施	その他
12	あなたがこの授業を履修した理由は何ですか (複数選択可)。	56.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.5	43.8	0.0	0.0
Q	質問項目	DWCLA10選択率(%)								DWCLA10＝卒業までに身につけて欲しい10の力	
		分析力	思考力	創造力	プレゼン テーション力	コミュニ ケーション力	リーダー シップ	思いやる力	変化 対応力	自己 管理力	自己 実現力
15	DWCLA10の内、この授業の履修を通して その獲得や向上に役立ったと感じられるものを すべて選んでください(複数選択可、なしも可)。	37.5	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.3	0.0	0.0

グラフ 1 2016年度 グラフ

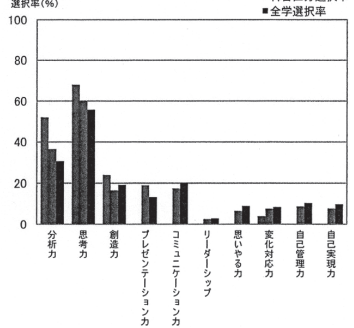
■設問別評点平均値 (Q4・6を除く)



■Q4 授業外学習時間



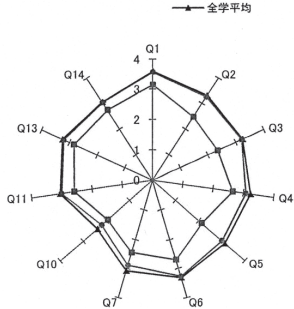
■DWCLA10選択率



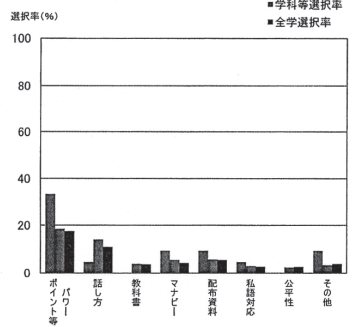
グラフ 2 2017年度 グラフ

■設問別評点平均値

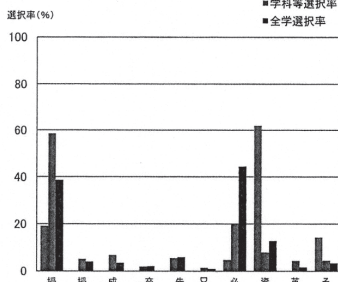
(Q8・Q9・Q12・Q15を除く)



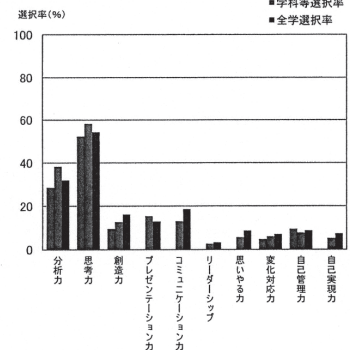
■Q8 工夫点選択率



■Q12 履修理由選択率



■Q15 DWCLA10選択率



グラフ 3 2018年度 グラフ

